筑紫女学園大学リポジト

Categories in Emphatic Expressions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/420

強調表現とカテゴリー

緒　方　隆　文

Categories in Emphatic Expressions

Takafumi OGATA

1．はじめに

強調表現は、それが純粋であればあるほど、意味を何も加えない。強調構文であれ、副詞や形容詞による強調であれ、修辞による強調であれ、本質として意味的には空の表現である。（1）から強調表現を取りのぞいても、本質的意味は変わらない。

（1）　a. *It's dark green that* we've painted the kitchen.

b. She has *certainly* been enthusiastic about her work. (Quirk, *et al.* 1985 : 1385, 485)

c. *Never in my life* have I known such peace.

– R. Menon, *The Mahabharata: A Modern Rendering.*

意味的に空とすれば、いくつか疑問が生じる。一つめ、意味を加えないとすると強調とは何なのか。どんなプロセスが働いているのか。意味を強めるとはどういうことなのかという疑問である。もっとも強意表現には意味に段階性がある。すべてが意味的に空ではない。意味を携えながら強調するものもある。しかし強意はその本質上、意味を加えるのではなく、何かを強調するためにある。

この一つめの問いに対し本稿では、強調とはカテゴリーの明確化であると主張する。カテゴリーはここでは広い概念で、様々なものがカテゴリーとみなされる。強調されるものをカテゴリーと見なし、背景化によって明確に境界線を規定しなおすプロセスが強調と考える。この背景化のプロセスには２通りあり、それをトートロジーを通して説明し（２節）、３節，４節で種々の強調表現を考察する。

二つめの疑問として、意味や強調の段階性がある。意味が空の場合と、意味を携えて強調する場合、どうプロセスが異なるのか。また強調する程度の違いはどこからくるのかという疑問がある。この二つめの疑問に対し本稿では、カテゴリーと語彙情報の連結スキーマを提案する。語彙

情報には尺度があり、尺度上でどの位置にあるかが、強調の程度と連動することを示していく。こうした語彙情報との連結が、共起制限などの制約を生み出していると考える。

本稿では、強調表現そのものが背景化のプロセスを通して成立しており、そこにカテゴリーという概念が中心的働きをしていることを示すことを目的とする。そのため広く強調表現全般を考察していく。

2．内部背景化と外部背景化（トートロジーを通して）

トートロジーはカテゴリーを再定義する表現であり、カテゴリーと深く関わっている（cf. 緒方2006）。そのためカテゴリーをトートロジーを通してみていく。そもそもカテゴリーには境界線がある。しかしこの境界線は固定したものではなく、状況・場面・人などにより境界線は変化する。カテゴリーに含まれる成員と、含まれない非成員は固定していない。

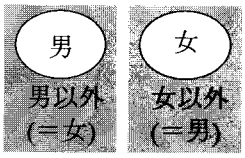
したがって言及するカテゴリーを明確にする必要が生じたとき、まずはその境界線自体を明確にする必要がある。明確にするためのプロセスが背景化になる。非成員を背景化することで、何が成員になるのか、どこに境界線があるのかを明確にできるからである。

トートロジーで背景化のプロセスをみる。背景化にはタイプが２つある。一つは「XはYでないもの」と［他でないことを述べる］方法がある。これは別カテゴリーを背景化することで、当該カテゴリーを前景化する方法である。もう一つは「Xはxという属性を持つ／持たないもの」と［中身に言及する］方法である。これはもともとカテゴリーの成員だったものを背景化し、限定したカテゴリーに縮小し、規定し直す方法である。前者の例が（２）、後者の例が（３）になる（例文は坂原2002：112-3, 124）。

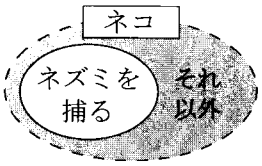
（２）しょせん、男は男、女は女だ。　（３）ネズミを捕ってこそ、ネコはネコ。

（２）は［XはYでないもの］と、他カテゴリーでないことを強調し当該カテゴリーを再確認する。前半で「男は男であって男以外（女）ではない」、後半部分で「女は女であって女以外（男）ではない」という意味になる。一方（３）は［Xはxという属性を持つもの］と、カテゴリー内部で背景化がおこる。ネコの属性を問題にし、ネズミを捕るネコに限定してネコのカテゴリーを再定義している。

（２）’



（３）’



前者（２）’は、外部（他カテゴリー）を背景化するため外部背景化と呼ぶ。後者（３）’は、カテゴリー内部の特性（x以外）を背景化するので内部背景化と呼ぶことにする。

このようにトートロジーは当該カテゴリーを、背景化によって規定し直す構文とみなすことができる。また見方を変えれば、同一語句を繰り返しているため、繰り返しによる強調表現の一種と見なすことができる。強調とは「他でもなくそれ」が基本的な意味であり、他を背景化し、強調するものを前景化している。つまり強調には背景化のプロセスがある。もっと言えば強調とは、背景化によるカテゴリーの明確化と予測される。これを続く２つの節で見ていく。

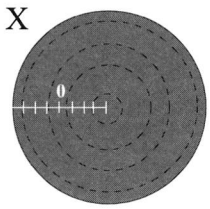
3．強意詞（intensifier）と強調詞（emphasizer）

前節でカテゴリーは固定したものではなく、流動的な側面があり、ときにカテゴリー（の境界線）を規定し直していると述べた。その方法として、２つの背景化－内部背景化と外部背景化－という手段を用いることをみた。このときカテゴリーを（４）のように定義する。

（４）　カテゴリーとは、他を背景化することで定まる成員の集合を言う。

ここで言う成員は個体に限らず、属性なども含むと考えていく。そして強調されるものをカテゴリーと見なし、カテゴリーの境界線を背景化によって明確化することが強調であると主張していく。

強調されるものには通例、様々な程度差を持ったものが存在する。それら一つ一つを成員と見なすとき、カテゴリーを形成していると考えることができる。このカテゴリーには程度差が異なる成員が含まれるが、見方を変えれば、程度が一番高いものは一番典型的な成員といえる。というのも程度が高いということは、どこからどう見てもまぎれもなく「それ」となるため、その成員はプロトタイプになる。つまり程度が高いものがプロトタイプで、程度が低いものは周辺的成員といえる。これをスキーマで示したものが（５）である。（５）では程度が一番高いプロトタイプを中心に据え、程度が弱い周辺的な成員を順次外側に配置している。また目安としてスケールが入っておりそこに段階性があることを示している。　（５）



以下このように、強調されるものはすべてカテゴリーと見なしていく。そのカテゴリーの境界線を、背景化のプロセスによって、強調表現が規定し直すと考える。言い換えれば強調表現が、カテゴリーを再規定する。（５）のスキーマをもとに背景化のプロセスが適用され、種々の強調が生じていく。以下強調表現を見ていくこととする。

まず強調表現を考えるにあたって、強意詞（intensifier）と強調詞（emphasizer）について考察したい。これらはQuirk, *et al.*（1985：589-90）の用語で、次のように分類される。強意詞は誇張語と緩和語に分類され、さらに前者は２つ、後者は４つに下位分類される。強調詞は、Quirk, *et al.*（1972）では強意詞に含まれていたが、Quirk, *et al.*（1985）では別枠になった。以下この分類をもとに考察していく。ただし背景化の観点から見るとき、この分類では正しくとらえきれない。そのため代表的なものをとりあげ、各分類の中に入りながら異なる背景化のパターンをとるものに関しては４節で扱うこととする[注1]。

（６）　**Intensifiers（強意詞）**

（Ⅰ）**Amplifiers（誇張語）**
- **Maximizers　（極大詞）**（absolutely, altogether, completely, etc.）
- **Boosters　（上昇詞）**（badly, bitterly, deeply, enormously, far, etc.）

(Ⅱ)Downtoners
(緩和語)
- **Approximators(近似詞)** (almost, nearly, practically, virtually, etc.)
- **Compromisers(妥協詞)** (kind of, sort of, quite, rather, enough, etc.)
- **Diminishers(減少詞)**
  ((ⅰ) mildly, partially, partly, somewhat; in part, to some extent; a bit, a little, etc. (ⅱ) only, merely, simply, etc.)
- **Minimizers(極小詞)** (barely, hardly; in the least, at all, a bit, etc.)

(7) **Emphasizers(強調詞)**

(actually, certainly, clearly, definitely, ; frankly, honestly, literally, etc.)

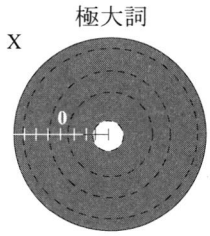
3.1 誇張語 (amplifier)

誇張語とは尺度で上部分、すなわち程度が高いことを示すために用いられる。極大詞と上昇詞に下位分類されるが、両者は明確に分けられるのではなく、現れる位置・使用者・場面などによって行き来する。とはいえ重要なのは分類ではなく、そこでどのようなプロセスが起こっているかである。以下それを示す。

3.1.1 極大詞 (maximizer)

極大詞の場合、程度が極めて高いプロトタイプ的成員であることを示す。スキーマで示すと(8)になる。中心以外を背景化することで、中心のプロトタイプが前景化される。

(8)

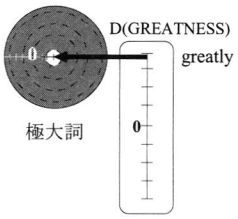


(9) a. I must *absolutely* refuse to listen to your grumbling.

b. We *utterly* deplore his tactics. (Quirk, *et al.* 1985 : 591)

純粋な強調であれば(8)になるが、しかし実際には極大詞の元々の意味・統語情報を携えて強調する場合がほとんどである。例えばQuirk, *et al.*が述べるように、greatlyは好意的含意を持つ動詞を修飾し、utterlyは非好意的な動詞を修飾する。またmuchは否定文・疑問文で主として用いられ、肯定文で用いる場合前位修飾が必要である。これら強調語は語彙情報を持っているが、こうした情報を(8)だけで表すことができない。そのため(8)と語彙情報を連結させる。図示したものが(10)になる。語彙情報と結びつくと、強調表現に何らかの共起制限が生じることとなる。

(10)



さてスキーマ(10)には2つ情報がある。一つは極大詞greatlyと連結することで何らかの語彙情報を引き継ぐこと、もう一つはgreatlyが元々何かの尺度で最上位を占めていることである。最上位にあることで程度の高さが示され、連動して(5)のプロトタイプのみが前景化される。尺度で最上位だから極大詞として使用されることとなる。このとき尺度はD(x)で表し、強調表現によってxが変化する((10)ではD(GREATNESS))。

これは俗語表現にもみられ、dead tired, dead against, dead sure などにおけるdead; stone

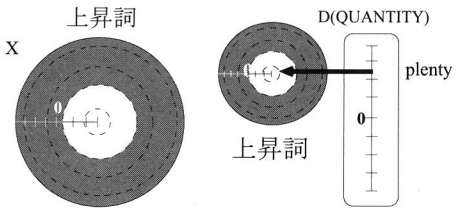
madness, stone dead, stone blindなどにおけるstoneといった表現がある。これは(10)の右側の尺度がいろいろと変わっているにすぎない。deadの例でいけば、D(DEATH)で最上位のdeadと連動することで、プロトタイプが前景化される。ただ使い古されればされるほど、(10)から(8)へ、さらに極大詞から上昇詞と推移していく。というのも前者の推移は元々持っていた意味が薄れてくるからであり、後者の推移は経験的に現実と見比べて大したことがないことが続けば、ただ単に程度が上程度の上昇詞と解されるようになるからである。

また極大詞は程度が極めて高いものを指すが、その中でも程度差がある。absolutely, extremelyなど極度に程度が高ければ、how, very, however などで修飾できない(Quirk, *et al.* 1985：592)[注2]。一方程度がより高めを示すにすぎなければ、こうしたものと共起できる。ということは極大詞と上昇詞は連続しており、明確に区別されるものではない。次節で上昇詞を見る。

3.1.2 上昇詞(booster)

上昇詞は程度が高いことを示すのに用いられる。図示したものが(11a)である。極大詞と比べ、前景化される中心の輪が大きくなっている。ここでも極大詞と同じように、語彙情報を引き継ぐ場合は(11b)のようになる。(11b)では連結することで、語彙情報を引き継ぐこと、上昇詞の尺度上の位置がカテゴリーの背景化と連動していることを示している。

(11)a.　　b.



(12) a. He must have *bitterly* regretted his mistake many times.

b. They resent him *deeply.*　　c. I need a drink *badly.*　　(Quirk, *et al.* 1985：591)

ただし前節で述べたように極大詞と上昇詞は連続しており、明確な境界線はない。上昇詞は極大詞と比べて程度がやや弱く、尺度の上部に位置するだけなので、それに呼応して前景化される部分も広がっているにすぎない。

関連する強調表現に、強意複数(Intensive plural)がある。複数にすることで、量などの尺度D(x)において、強調表現が上位部分に位置する。それと連動する形でその名詞のカテゴリーが強調される。スキーマは(11b)と同じである。強意複数が抽象名詞の場合、程度が強大であることを、具象名詞の場合は広がり・連続・集積などを表す。

(13) a. The widow was all *smiles* and contentment.　　– Mark Twain, *Pudd'nhead Wilson.*

b. Here the sands of the Sahara meet the *waters* of the Nile.　– K. Burns, *Mansa Musa.*

また意味を強調するものが、逆に意味を弱める場合がある。例えば、何もつけなければ一番程度が強い(典型的)意味を表す語をveryで強調すると、意味が弱まることがある。たとえばHe is bald; He is stingy. の方が単刀直入で、He is very bald; He is very stingy. より意味が強い(cf. 上本(1965：44))。これはbaldやstingyが単独であれば、極大詞スキーマになるのに、veryがつくことで上昇詞スキーマへと変化するからである。そのため意味が弱まってしまうと考えられる。

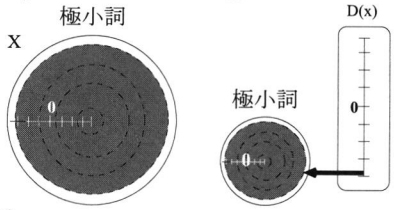
3．2　緩和語 (downtoner)

緩和語とは程度が高くないことを示すもので、極小詞、妥協詞、減少詞、近似詞の４つに分けられる。誇張語の極大詞・上昇詞に対応するものは、極小詞と妥協詞と減少詞になる。極大詞は一番程度が高い（中心的）成員をさすのに対し、極小詞は一番程度が低い（周辺的）成員をさす。上昇詞はより程度が高い成員をさすのに対し、妥協詞と減少詞はより程度が低い成員をさす。強意詞による強調は極大詞・上昇詞・極小詞・妥協詞の４パターンを基本とし、近似詞と減少詞はいわば応用したものになる。

3．2．1　極小詞 (minimizer)

極小詞は否定を表すもの (barely, hardly, scarcely, etc.) と、非断定を表すもの (in the least, at all, a bit, etc.) に分けられる。極大詞に対応するものは前者の否定であって、後者の非断定は別のプロセスをとる。ここでは前者の否定のみを考察し、後者の非断定は4.2.3節で後述する。(15) は否定の極小詞の例である。

(14) a.　　b.



(15)　a. She *scarcely* knows me.　b. He little realizes what trouble he has caused.

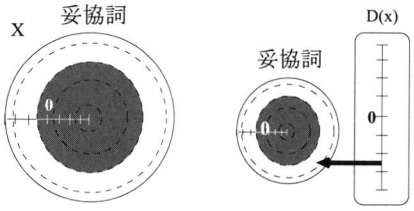
(Quirk, *et al.* 1985 : 598)

否定の極小詞は、カテゴリーにおいて一番周辺の成員を示すために用いられる。図示すれば (14a) になり、極大詞と対照をなす。ここでも極大詞と同じように、語彙情報を引き継ぐ場合は (14b) のようになる。極小詞は尺度上で一番低い位置を占めるために、それと連動する形でカテゴリーの一番周辺部分が前景化される。

3．2．2　妥協詞 (compromiser)

(17) の例からも分かるように、妥協詞は典型的な成員でないことを示す。上昇詞に対応するもので、図示したものが (16a) である。語彙情報を引き継ぐ場合 (16b) のようになり、妥協詞は尺度上でやや低めの位置になるため、それと連動する形で周辺部分が前景化される ((17) はQuirk, *et al.* 1985 : 598)。

(16) a.　　b.

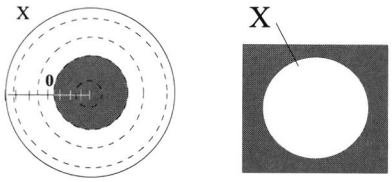


(17)　a. I *kind of* like him.　b. As he was walking along, he *sort of* stumbled and seemed ill.

3．2．3　減少詞 (diminisher)

減少詞は２種類あり、一つは部分的に適合することを (partly, slightly, somewhat, etc.)、もう一つは限定されたものであることを (only, merely, imply, just, etc.) 表現する。

(18) 減少詞（部分）　(19) 減少詞（限定）



(20)　a. The incident *somewhat* influenced his actions in later life.

b. We know them *slightly.*

(21) a. I was *only* joking. b. It was *merely* a matter of finance. (Quirk, *et al.* 1985 : 598)

この両者のプロセスは全く異なる。前者は (18) に示す内部背景化、後者は (19) に示す外部背景化になる。部分を意味する (18) は、妥協詞よりさらに背景化される中心部分が小さくなっている。程度は高くないが、それなりに (部分的に) 適合することを示している。この場合語彙情報を引き継ぐことはほとんどないため、尺度と連結するスキーマは省いている。ただ程度表示不可能な動詞とは共起することはない。一方限定を意味する (19) は、ただ単に他のものを背景化することで、強調しているにすぎない。例えば (21a) でいけば、侮辱や非難といったものではなく (背景化)、純粋にjokeであると述べている。

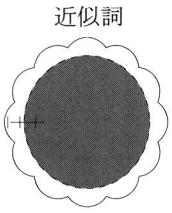
3．2．4 近似詞 (approximator)

近似詞は、今までのものと異なり、基本的に強調されるものに程度差がない。主観的に程度差を感じとることができないものである。カテゴリー内部に程度差がないため、それに近いという段階性を作るために外にカテゴリーを拡張する。図示したものが (23) である。拡張部分が前景化されるが、この部分は実質カテゴリーの外に位置する。

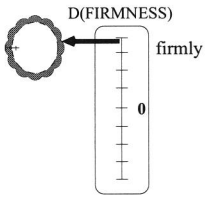
(22) a. He *virtually* dictated the terms of the settlement. b. I almost resigned.

(Quirk, *et al.* 1985 : 598)

(23)



(24)



本来カテゴリーに入らないものが、カテゴリーに近いということで疑似成員になっていると考えられる。そのためQuirk, *et al.*が述べるようにI almost resigned(but in fact I didn't resign).と前半を否定する内容を付け加えることもできる。しかしこれは否定しているのではない。カテゴリーの再定義を行っているにすぎない。almost resignでいったんカテゴリーを拡張したが、実際それはnot resignとカテゴリー外にあることを再定義し直したにすぎない。他の強調詞と違い、このようなことができるのは、拡張したカテゴリーが一時的に過ぎず、確固たるカテゴリーとしての資格を持ち得ないからだと考えられる。またこの場合、語彙情報の引き継ぎはあまりないように思える。

スキーマ (23) の関連表現として、believe *firmly*; *firmly* convincedなどの表現がある (cf. 上本 (1965 : 154))。元来程度差がないbelieveやconvincedに、強意表現firmlyをつけることで段階性が生まれ、さらにと強調する表現である。この場合もカテゴリーを外に拡張するが、近似詞とは逆に、カテゴリーそのものが前景化される。というのも連結するfirmlyが尺度で上部に位置するために、それと呼応する形で、外部が背景化される。冗長的表現であるが、スキーマは(24)になる。

(25) a. I *really* believe firmly now they can't kill him. − P. Grondahl, *I Rose Like a Rocket.*

b. We remain *firmly* convinced that Christian faith must be lived.

− L. Delgatto, *Catholic Youth Ministry.*

3.3　強調詞 (emphasizer)

強調詞には一般的に副詞と形容詞があり、副詞の場合、内容が真であることを強調する態度離接詞((26))と、話し手の断言が飾り気のない真実であることを強調する文体離接詞((27))がある。

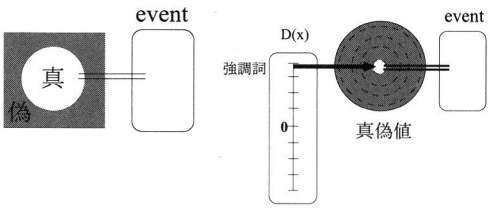
(26)　a. She could *actually* read the Greek.

　　b. They're *certainly* not yours.

(27)　a. 'No, I don't,' he answered *honestly*.

　　b. Her behaviour was *frankly* disgraceful.

(28) a.　　b.



前者は外部背景化の事例で、図示したものが(28a)である。偽が背景化され真が前景化される。その真と事態が連結し、内容が真であることを強調する。一方後者は内部背景化の事例で、図示したものが(28b)になる。強調詞は尺度D(x)で高い位置を占めるので、それと連動して真偽値カテゴリーの一番高い(中心的成員)の部分が前景化される。例えば(27a)で言えば、D(HONEST)という尺度でhonestlyは最上部にある。これがカテゴリーと連動する。そしてさらに事態と連結し、強調表現となる。(28a)では語彙情報と結びついていないので述語との共起制限はなく、一方(28b)では語彙情報と結びついているため共起制限が生まれる。例えばhonestlyは態度や認識を表す動詞と共起する(岡田1985:84)

(28b)の関連表現として、範囲などを示すことで強調する表現がある。(29)にあるように、空間・期間・数量などで制限を加えることで、かえって強調する。

(29)　[空間] in the world, on earth, under the sun[heaven], etc.; [期間] in one's life, etc.;

　　[数量] at all[注3], by all means, at all events, etc.; [その他] in existence, on record, alive, available, conceivable, imaginable, possible, etc.

(30)　a. What *on earth* did she do that for?

　　b. She had never *in her life* been more astonished. – Jane Austen, *Persuasion*.

これらは(28b)のスキーマで説明される。(29)にあげた表現は、あくまで主観において、尺度上一番上に位置する。in the worldであれ、in one's lifeであれ、もっと広かったり長かったりするものは客観的に存在する。しかし主観的には当面、最大の広さであり最長の期間と見なされている。尺度D(x)は、空間であれば広さD(LARGENESS)、期間であれば期間D(TIME SPAN)と変化し、尺度で一番上に位置する強調表現は、真偽値カテゴリーの中心部分と連動し、eventと連結する。したがってスキーマは(28b)と同じである。

(29)の類例として(31)がある。これらの表現もまた力や悪といった尺度で、一番上にくるものを持ってきて、eventの真実性が高いことを示す。スキーマはやはり(28b)と同じである。

(31)　by God, for God's sake, for the love of God; in hell, the hell, black devils, the devil, as hell, etc.

(32)　a. Flame and smoke *for the love of God!* – Pietro Di Donato, *Christ in concrete : A Novel.*

　　b. My gosh, Kerry, what *in hell* is it all about? – F. Scott Fitzgerald, *This Side of Paradise.*

4．その他の強調表現

３節で述べた以外の強調表現を本節で見ていく。ここで扱うものには、３節の強意詞に含まれるものもあるが、本論では語の分類が重要なのではなく、強調表現が背景化のプロセスによるものであることを示すことを目的とする。よってプロセスごとに述べることとし、３節の分類は便宜上のものと考える。以下外部背景化、内部背景化、その両方にまたがる表現を見ていく。

4．1　外部背景化

4．1．1　繰り返し

強調の手段として、同じものを繰り返す方法がある。繰り返すものに、語、句、節など様々なものがある。(33a) は語、(33b) は句、(33c) は節が繰り返されている。繰り返すことで「それ、それ、それだけ」と強調される。(34) に示すようにX以外が繰り返し外部背景化されるため、Xの意味が純化され、周辺的Xがそぎ落とされていく。この場合、時系列が伴わない (34a) と、時系列を伴う (34b) がある。時系列が伴うとは、それが時間的に連続して起こる（泣き続ける）ことを意味する。こうした繰り返しはagain and againのように使い古されて慣用表現となるものもある。

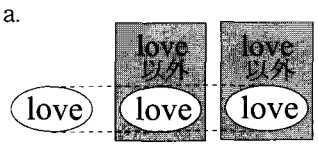
(33)　a. "I *love love love* you," he mumbled between kisses. － Jackie Collins：*Chances.*

b. He *asked her and asked her and asked her.*（小西 1982：100）

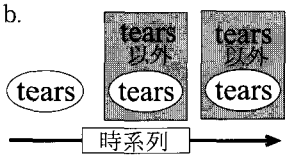
c. They wanted him for guest shots, record albums, personal appearances, merchandising, benefits, movies, *they wanted they wanted they wanted.*

－ Sheldon, *A Stranger in the Mirror,* p.244（奥田 1983：73）

(34)　a.



b.



なお否定語句が繰り返される場合でもこうしたことが起こる。通例２個の否定語が同じ概念、同じ語に適用されると、相殺して肯定の意味になる。しかし２個・３個それ以上続いても、相殺せずに強い否定の意味を表すことがある。これは (34a) と同じように他が背景化され、意味が純化していると考えられる（(35) は上本1965：22)。

(35)　a. "Ca*n't nobody* do *nothing* with him," Nancy said.　— W. Faulkner, *That Evening Sun.*

b. We ai*n't never* took *no* charity," Mrs. Joyce said.

— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath.*

また関連表現として、if and when; one and only; over and above; one and the sameのように、似た意味の語を並べ強調する場合がある。これも一種の繰り返しと見ることができる。

(36)　a. *If and when* we take measures against them, it will be with genuine regret.

－ A. Leopold, et al., *The River of the Mother of God and Other Essays.*

b. Therefore, there is *one and only* one supreme Good. − Anselm, *Basic Writings.*

c. Again, there is no such thing as motion *over and above* the things.

− Aristotle, *Physics.*

さらに漸層法（climax）もここに含まれると考えられる。漸層法とは、語や節を連鎖的に続けることで、感情を高めていく修辞法である。そこでは表現を変えながら、複層的に背景化することで意味を強めていると考えられる（(37) は上本1965：153）。

(37) All Paris, all the provinces, buy it (i.e. the book) *by the hundreds, by the thousands, by the hundreds of thousands.* — *The Literary Digest.*

4．1．2　分裂文と疑似分裂文

分裂文 (38)、疑似分裂文 (39) もまた外部背景化の事例になる。「他でもなくそれが」というのは、他を背景化しそれだけに焦点をあて、浮かび上がらせる手法といえる（(38) (39) はQuirk, *et al.* 1985：1383-1385）。ただ浮かび上がった焦点部分は、分裂文と疑似分裂文では位置が異なる。焦点部分が前に来るのが分裂文、後ろに来るのが疑似分裂文である。それを図示したものが (40) である。とはいえどちらも焦点部分と旧情報部分が連結する。これら構文は考察することが多いが、ここでは外部背景化の一例であることを示すにとどめたい。

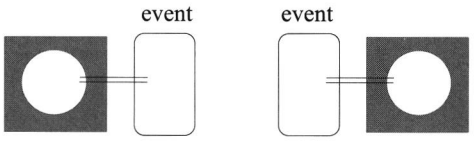
(38) a. It was a doctor that he eventually became.

b. It is his callousness that I shall ignore.

(39) a. What you need most is a good rest.

b. What John did to his suit was ruin it.

(40) a.　　b.



分裂文　　疑似分裂文

4．1．3　強調のtheとdo

構文という形をとらず、強調のtheやdoを付加することで、強調することがある。これはtheやdoを目印として「他でもなくそれ」と対象を強調する。他でないとは、外部背景化によって他者を背景化するプロセスをとることを意味する。(41a) は強意のthe、(41b) は強調のdoの例になる。

(41) a. *The* Mr. Churchills were also in town. − Austen, *Emma*.

b. *Do* be willing to give the veteran some space. − Raymond M. S., *Vietnam to Iraq.*

4．1．4　句読法

句読法による強調は、いわば前節the, doの延長線上にある。「(他でもなく) それ」と目印となるものがあればいい。目印の方法として、イタリックスにする、引用符、感嘆符、ダッシュ、コンマ、セミコロン、コロン、大文字にするなどの方法がある。もちろんこれは他を背景化する外部背景化の事例となる。(42a) はイタリック、(42b) はdash、(42c) はcolon、(42d) はcapital lettersによる強調の例である（(42) は上本1965：163-168）。

(42) a. The man was not asleep. *He was dead.*

− Agatha Christie, *And Then There Were None.*

b. But they didn't want me – even then. – *True Confessions,* Dec. 1960.

c. Ah, how he had wanted her : Winifred! – D. H. Lawrence, *England, my England.*

d. If it is a bargain, ask yourself WHY? – *Reader's Digest,* March 1960.

4．1．5　語順と外位置 (Extraposition)

語順で「(他でもなく) それ」を示すことがある。この場合目立つ位置に置くことで目印とする。具体的には文頭と文尾があるが、文尾の方がより強い強調となる。文頭に置く場合、倒置が起こるときとそうでないときがある。一方文尾に置く場合、コンマ後に文の要素が置かれる場合と、名詞の後に特別に形容詞が置かれ強調される場合がある。いずれにしても目立つ位置に置くことで、外部背景化が起こる。(43) が前位の例、(44) が後位の例である ((44) は上本1965 : 124,126)。

(43) a. *She it was* who gave me everything. – G. E. King, *Monsieur Motte.*

b. Now, *all this* I can bear. – Charles Dickens, *All the Year Round.*

c. *Never again did he* want to be the one to break her heart.

– E. D. Arrington, *On the Edge.*

(44) a. It was necessary to be alone, *to think.* – Aldous Huxley, *Limbo.*

b. For the wealthy, there are volumes *magnificent.* – George Gissing.

後位と関連する表現として、外置がある。外置は語句が文中の定位置にこず、そこに代名詞を置き、それ自身は独立して文から遊離した位置をとるものである。文法的には前位・後位と大きく異なるが、強調という観点から見れば、前位・後位と同じ外部背景化の事例といえる。

(45) a. We drifted together at once, *my friend and I.*

– Agatha Christie, *The Man in the Brown Suit.*

b. *Safety,* that was what I was being offered.

– Agatha Christie, *The Man in the Brown Suit.*

4．1．6　省略

裏技的方法に、省略がある。強調する語句以外を背景化し削除するという方法である。残った語句だけが前景化されるため、語調が強まり切迫感が生まれる。この場合、二重に背景化が起こっている。一つは強調語句以外の背景化(削除)、もう一つは強調語句の外部背景化である。後者は「他でもなくそれ」という意味で、今まで述べてきた他の外部背景化のプロセスと同じである。(46a,b) は述部を省略し、(46c) は返答で省略が行われている。

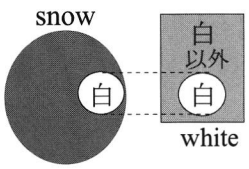
(46) a. Tom a killer!　b. Your brother dead? (上本1965 : 144)

c. Was anyone with you? *My girlfriend.*

4．1．7　重複表現

white snow, white milk, green grass のように、本来属性としてあるものを、明示的に語彙化することで強調する表現がある。冗語的であるが、その属性の程度が極めて高いことを示す。プロセスを white snow でみれば、snow に元々ある属性白さを語彙化

(47)

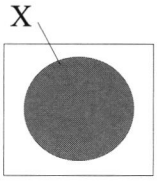


(white) することで、単なるwhiteではなく典型的なwhiteと見なされる。普通の白でなく、白の中の白という意味になる。繰り返し表現と同様に、白がさらに外部背景化されるため意味が純化する。white snowは純白の雪であって、中途半端な白ではない。図示したものが (47) である。

4．1．8　anything but他

最後に慣用表現でしめたい。外部背景化は「他でもなくそれ」とすることで、カテゴリー以外を背景化する。それとは反対にカテゴリー自体を背景化するものがある。図示したものが (49) である。「カテゴリーX以外」という意味で、anything but(「～以外の何か」)、似たものにnot anything like(「～と似たもの以外」) などがある。またカテゴリーXから離れていることを表現するfar from～ing; the lastという表現もある。カテゴリー全体を背景化するので、外部背景化と反対のスキーマになるが、これもまた強調がカテゴリーと背景化によって規定されることを確認する事例といえる。

(49)



(48)　a. He's *anything but* a swell, really.

－ D. H. Lawrence, *Women in Love*.

b. There was *not anything like* inebriety.

－ G. Santoro, *Myself when I am real*.

c. She was *the last* person to see him alive.　－ H. G. Wells, *The Invisible Man*.

4．2　内部背景化

本節では3節で見たもの以外の内部背景化の例を見ていく。これらは3節とは違いやや特殊なプロセスをとる。

4．2．1　修辞疑問

疑問文の形式をとり、自分の考えを反語的に述べる表現がある。修辞疑問 (rhetorical question) と呼ばれる表現で、強調表現の一種といえる。肯定疑問文は強い否定を、否定疑問文は強い肯定を表す ((50) (51) はQuirk, *et al.* (1985：826))。

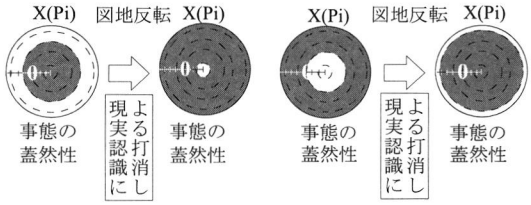
(50)　a. Who doesn't know? (=Everyone knows.)

b. How couldn't you remember? (=You certainly should have remembered.)

(51)　a. Who knows? (=Nobody knows.)

b. What difference does it make? (=It makes no difference.)

(52) a.　　b.



どちらの場合も話し手は聞き手に答えを期待していない。話し手／聞き手双方とも答えが分かっているからである。この答え、言い換えれば「現実認識」によって反語表現と解釈され、強調の意味が生まれる。プロセスを (52) に示す。(52a) は否定疑問文の例である。まず様々な蓋然性を成員とするカテゴリーを想定する。このとき事態を否定する否定疑問文を使うことで、蓋然性の低い部分が最初に前景化される。(52a) では周辺部分 (事態の蓋然性の低い部分) に焦点

があたる。しかし現実認識では、その逆で蓋然性は極めて高い。そのため図地反転が起こり、蓋然性の高い部分（(52a) では中心）が前景化される。一方 (52b) は肯定疑問文の例である。事態を肯定する肯定疑問文を使うことで、まず蓋然性の高い中央部分に焦点があたるが、現実認識により打ち消され、図地反転が起こり、蓋然性の低い周辺部分に焦点があたる解釈となる。

4.2.2　緩叙法

修辞疑問と似たプロセスをとるものに緩叙法がある。緩叙法とは、控えめな表現を使うことで効果を強める表現を言う[注4]。誇張の反対表現になる。(53) は肯定で控えめな表現を使った例で、(54) は否定の意味合いを持つものを否定することで印象を強める例である。スキーマはどちらも (55) になる。

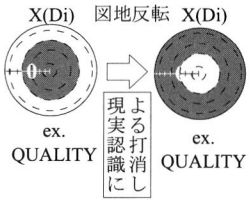
(53)　a. Did you ever hear him, Tom?' ... *Rather!* I heard him ...　　– James Joyce, *Dubliners.*

　　b. This is *some* war.　　– H. Wells, *Mr. Britling Sees It Through.*

(54)　a. not (too) bad (≒ very good)

　　b. I praise you not. (≒ I blame.)

(55)



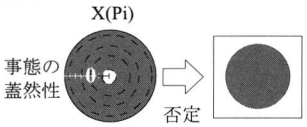
まず質などにおいて程度差がある成員の集合、カテゴリー X(Di) を想定する。このカテゴリーは中心であれば程度が高く、周辺であれば程度が低い。強調されるものがこのカテゴリーになる。肯定の控えめ表現で考えれば、控えめな表現を使うことで、いわば周辺部分が前景化される。ところが反語法と同じく、現実認識とずれがある。そのため打ち消しがおこり、図地反転がおこる。否定の控えめ表現でも同様に周辺あたりが前景化され、同じプロセスが適用される。どちらの場合も反語法と違って、妥協詞レベルの反転がおこる。ただこの表現が慣用化してくると、反転ではなく右側のスキーマを直接表すようになると思われる。

4.2.3　Not a bit.他

否定表現の中に、小さいもの、価値のないものを否定することで強い否定を表すものがある。これらは本来極小詞に含まれるが、他の極小詞とプロセスが異なるので本節で扱う。

(56)　a. She didn't say *a single* word.　　b. I'm not *a bit* tired.　　c. I don't care *a bit*.

(57)



まず事態の蓋然性をカテゴリー X(Pi) として考える。事態が起こる可能性は様々あるが、可能性が一番高いもの（蓋然性が一番高いものが）が中心的成員と考えることができる。(56) では a single word を言うこと、少し tired すること、少しだけ care することは、蓋然性が極めて高い。つまり一番起こりやすい事態である。それを否定するため、X(Pi) はすべて背景化されてしまう。そのため X(Pi) 以外に焦点があたり、全く何々ないと強い否定の解釈が生じる。つまり可能性はゼロということになる。それを示したものが (57) になる。価値のあるもの、大きいものではなく、なぜ価値のないものを否定すると強い否定の強調になるのかは、蓋然性の問題であり、それをカテゴリーと見なすことで説明することができる。

4．2．4　直喩表現と誇張法

(58) にあげるような直喩表現もまた、強調表現の一種である。比喩を使うことで、その程度が強いことを示している。プロセスは極大詞と同じで、他の尺度と連動する形で、内部背景化がおこる。極大詞と比べて、語彙情報の引き継ぎはほとんどないが、比喩表現なため、イメージが反映する形となる ((58) は上本1965：156)。図示したものが (59) になる。

(58)　a. Giles Collins was *as white as a ghost.*　　– J. D. Carr, *The Devil in Velvet.*

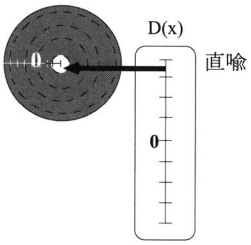
b. He looked at Fred and saw that he was *as white as a sheet.*

– S. Maugham, *The Narrow Corner.*

c. You are *as thin as a lath and as brown as a nut.*"

– Conan Doyle, *A Study in Scarlet.*

(59)



この直喩表現をさらに一歩進めたのが誇張表現になる。誇張表現でもまた、程度だけでなく、誇張表現が持つ属性（イメージ）をも結びつける。例えば (60a) では攻撃の程度が強かったことを示すとともに、集中砲火というイメージがそのまま表現に反映された形となっている。

(60)　a. He does not hide behind *a barrage of words.*

– A.Roback, *Jewish Influence in Modern Thought.*

b. She broke down in *a rain of tears.*　　– M. V. Terhune, *Moss-side by Marion Harland.*

4．3　両方にまたがる表現（強意代名詞、all＋抽象名詞、no名詞）

ここでは名詞を強調する３つの方法、強意代名詞、all＋抽象名詞、no＋名詞をみていく。まず強意代名詞は抽象名詞につくものと ((61))、人を表す名詞や代名詞につくものがある ((62))。

(61)　a. Hannah is faithfulness *itself.*　　– L. M. Alcott, *Little Women; Little Men; Jo's Boys.*

b. We have said of Fantine that she was happiness *itself.*

– V. Hugo, N. Denny, *Les Miserables.*

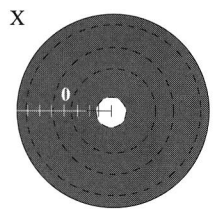
(62)　a. At this moment we saw the man *himself.*

– A. C. Doyle, *The Case-Book of Sherlock Holmes.*

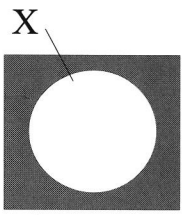
b. The friend was *herself* the first to proclaim it.　　– Henry James, *What Maisie Knew.*

抽象名詞につく場合、通例「まさにそれ」と抽象名詞の表す性質を強める。周辺ではなく、典型的な性質を持っていることを表す。happiness itself では「幸せそのもの」の意味となる。よってこれは内部背景化の例になる（図は (63)）。一方、人を表す名詞や代名詞の場合、通例それ以外の部分を背景化して、誰あろうその人がの意味となる。外部背景化の例になる（図は (64)）。

(63)



(64)



しかしこの区別はそれほど明瞭ではない。抽象名詞であっても段階性のないものは、外部背景

化される((65))。人であっても、典型的なその人の特徴としてみることもある。その人の属性で、中心的な一部分を前景化する。この場合は内部背景化になる。つまり特徴としてみれば内部背景化、個体としてみれば外部背景化の解釈となる。したがって名詞の種類は単なる目安にすぎない。

(65) a. Life *itself* is only a vision, a dream. "

– Mark Twain, *The Mysterious Stranger and Other Stories.*

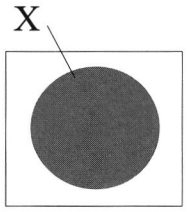
b. Pain *itself* is comic. – Paul Oppenheimer, *Till Eulenspiegel: His Adventures.*

(66) And yet he was *himself* a landowner.

– F. Dostoyevsky, M. Jaanus, *The Brothers Kara mazov.*

この類例としてall＋抽象名詞、no＋名詞がある。(68) にあるように、all＋抽象名詞ではallがつくことでカテゴリー内部、ひいては典型的な成員に焦点があたる。「まさにそれ」の意味になるため、内部背景化の事例となる (図は (63))。一方、no＋名詞がbe動詞の補語となる場合、反対の記述が真であることを強調する ((69))。この場合「それ以外のもの」ということで、外部背景化の反転した形のプロセスが働いている (図は (67))。同じように強調しているようで、両者のプロセスは全く異なるものと言うことができる。

(67)



(68) Lord bless us, this is *all nonsense*! – Mark Twain, *The Gilded Age.*

(69) a. He is *no fool.* – R. Kipling, *Kim.*

b. A man's *no sailor* if he can't take a joke.

– R. H. Dana, *Two Years Before the Mast.*

5．おわりに

本稿では、強調とはカテゴリーの明確化であると主張した。強調されるものをカテゴリーと見なし、背景化によって境界線を明確に規定しなおすプロセスが強調と考えた。語彙情報の引き継ぎや、強調の程度の度合いについては、尺度をもった語彙情報と連結することで説明してきた。強調表現には様々なものがあるが、そのすべてが背景化のプロセスを通して成立しており、そこにカテゴリーという概念が中心的働きをしていることを示した。

注

注1．quiteのように、2つ以上の下位類 (極大詞と妥協詞) に属するものもある。

注2．分裂文の焦点にもなれない。焦点を決定する極大詞が、焦点になること自体矛盾しているからである。

注3．at allなどはQuirk, *et al.* 1985では、極小詞に分類される。しかし3節で述べたように、Quirk, *et al.*の分類に固執することなく、背景化のプロセスの違いによって記述していく。

注4．言い表したい事態の逆を否定することで、強い意味の肯定を表す場合にはlitotes(曲言法)ということもある。両者は区別しないことも多い。

参考文献

Altenberg, B. 1991. "Amplifier collocations in spoken English," In: Johansson, S. & Stenström, A. (eds) *English Computer Corpora: Selected Papers and Research Guide.* Mouton de Gruyter : Berlin.

Athanasiadoua, A. 2007. "On the subjectivity of intensifiers," *Language Sciences* 29-4 : 554-565.

Bolinger, D. 1972. *Degree Words.* The Hague: Mouton.

Greenbaum, S. 1969. *Studies in English Adverbial Usage.* London: Longman.

_____. 1970. *Verb-Intensifier Collocations in English.* The Mouton: Hague.

稗島一郎. 1990. 『英語における強意副詞の研究』東京：弓書房.

池田義一郎. 1967. 『否定・疑問・強意・感情の表現』東京：研究社.

小西友七. 1982. 「A is A is A構文－ひとつの答」『時事英語研究』37-1, 100.

上本明. 1965. 『現代英語の強意表現』東京：篠崎書林.

森田順也. 1994. 「文法化：文法的推移による強意詞形成の場合」『金城学院大学論集. 英米文学編』35, 285-303.

Nevalainen, T. and M. Rissanen. 2002. "Fairly pretty or pretty fair? On the development and grammaticalization of English downtoners," *Language Sciences* 24, 3-4 : 359-380.

緒方隆文. 2006. 「トートロジー—背景化による強調—」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第1号. 31-47.

岡田伸夫. 1985. 『副詞と挿入文』東京：大修館.

奥田隆一. 1983. 「同語反復とA is A is A構文」『近畿大学教養部研究紀要』14（3）, 69-81.

Quirk, R. *et al.* 1972. *A Grammar of Contemporary English. London*: Longman.

_____. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Stoffel, C. 1901. *Intensives and Down-Toners: A Study in English Adverbs.* Heidelberg: Carl Winter.

Stenström, Anna-Brita 1998. "He was really gormless – She's bloody crap. Girls, boys and intensifiers," In : H. Hasselgard & S. Oksefjell (eds). *Out of Corpus.* Amsterdam: Rodopi.

Tsujimura, N. 2001. "Degree words and scalar structure in Japanese," *Lingua* 111, 29-52.

（おがた　たかふみ：英語学科　教授）